中部学院大学・中部学院大学短期大学部　教育実践研究第４巻(2018) 125－133

教育実習の学びを拡充し実践的な指導力育成を図る学校インターンシップ

服　部　吉　彦[1)]・友　田　靖　雄[1)]

School Internship to Improve Practical Skills and Methods after Teaching Practice for Pre-teachers in Higher Education

Yoshihiko HATTORI and Yasuo TOMODA

本稿は、「小学校教育実習」後に同一校で実施する「学校インターンシップⅠ」の学修を対象とし、小学校教育実習で学び得たことを基に、学生がどのような課題を持って学校インターンシップ活動に臨み、どのような児童観、指導観、教育観、教育技術等を獲得したのか、学生の実習ノート、実習校の校長や担当教員、本学担当教員からの聴き取り調査等から明らかにすることを通して、教育実習と学校インターンシップを同一校で連続して実習することが実効的な実践的指導力を養成する上での効果を評価しようとするものである。

キーワード：教師力の養成、実践的な指導力、教育実習と学校インターンシップの連続性

はじめに

教育職員養成審議会は、養成段階で修得すべき「最小限必要な資質能力」と「実践的な指導力につながる資質能力」について下記表１のように説明している。(『新たな時代に向けた教員養成の改善方策について』(第１次答申1997年))

表１　養成段階で修得すべき資質能力（筆者作成）

資質能力	具体的な資質能力の内容
(1) 最小限必要な資質能力	採用当初から学級や教科担任をしつつ教科指導、生徒指導等の職務を著しい支障が生じることなく実践できる資質能力
(2) 実践的な指導力につながる資質能力	①　幼児・児童・生徒観、教育観といったこどもや教育に関する適切な理解 ②　教職に対する情熱・使命感、子どもに対する責任感、興味・関心 ③　教科指導、生徒指導等を適切に行う指導力

そして表１中の(1)や(2)の資質獲得にかかわり「幼児・児童・生徒観、教育観を身に付けるためには、子どもたちと実際にふれあったり子どもたちの様子を観察したりする機会が大切である。教育実習はもとより選択科目や課外における諸活動を通じ、このような機会が少しでも多く教員を志願する者に提供されることが望まれる。その際、障害のある子どもたちとのふれあいの機会の確保等にも十分留意する必要がある。」と、教育実習以外にも、障害のある子も含めた子どもたちとの直接的なふれあいができる教育活動の導入を求めている。

こうした課題を受け止め、本学教育学部では、平成27年度（2015)、「学びの森教育プラン」を創設し今年で４年目（完成年度）を迎えている（図１)。

本稿の目的は、このプランに位置づけられている「学校インターンシップⅠ」を取り上げる。そして、以下のことについて究明し、今後の改善に生かしたものである。

①　小学校教育実習と連続させることによって、教員養成審議会が求めている表１の(1)や(2)の資質能力が修得されているのか

1）教育学部子ども教育学科

② 小学校教育実習の直後に同一校での学校インターンシップに携わることの効果は見られるか

1　学校インターンシップの定義・意義

インターンシップは、「学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと」(『インターンシップの推進についての基本的な考え方』文部省・通商産業省・労働省1997年）である。学生にとっては、職業意識の向上に寄与するようになり、職業選択に役立つ経験を得る機会ともなっている。

こういったインターンシップの考え方を「教員」という職業に就く学生に対して、「教育実習」の期間に加え「学校インターンシップ」を通して、実際の学校現場での教員の職務遂行の現状を体験的に経験する機会をもたせることは、大学の目的である「養成」機関としての役割を果たす上で大きく貢献するものである。『これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について』(中央教育審議会答申2015年12月）では、学校インターンシップの意義について、次のように述べている。

① 学校現場をよく知ることができ、既存の教育実習と相まって、理論と実践の往還による実践的指導力の育成に有効

② 学生がこれからの教員に求められる資質を理解し、自らの教員としての適格性を把握するための機会として有意義

③ 受け入れる学校側においても学校の様々な活動を支援する地域人材の観点から有益

このうち①については、本稿で特に実証したい「意義」のひとつである。

先の『新たな時代に向けた教員養成の改善方策について』の答申素案で、「学校インターンシップの実施イメージ」(右上表２）として、学校インターンシップと教育実習の比較をしている。

また、同答申では、「学校インターンシップの実施に当たっては、既存の教育実習との間で役割分担の明確化を図るとともに、その円滑な実施に向けて、受け入れ校の確保や実施内容の検討等のため教育委員会や学校と大学と連携体制の構築、大学による学生に対する事前及び事後の指導の適切な実施、学生側と受け入れ校側のニーズやメリットを把握するための情報提供の実施等、環境整備について今後十分に検討することが必要である」と述べている。

表２「学校インターンシップの実施イメージ」

	学校インターンシップ	教育実習
内容	学校における教育活動や学校行事、部活動、学校事務等の学校における活動全般について、支援や補助業務を行うことが中心	学校の教育活動についての職務の一部を実践させることが中心
実施期間	教育実習より長期間（ただし、一日当たりの時間数は少ない）	４週間程度
学校の役割	学校が行う支援、補助業務の指示（教育実習のように学生に対する指導や評価は実施しない）	実習生への評価表の作成（そのための指導教員を専任し、組織的な指導体制を構築）

本学部では、こうした指摘を受け、大学所在地の各務原市と連携協定を結び、毎年１月に、教育委員会、校長会の関係者との間で連絡会議を持ち、実習の評価や次年度の実習依頼等を行っている。また、教育実習と学校インターンシップを連続して同一校で実施（原則）することについても了解を得ている。

2　「学びの森教育プラン」における「学校インターンシップⅠ」の位置付け

「学びの森教育プラン」は図１の①～⑥の６科目から構成された教職体験科目群である。「教育現場参観」「教育現場体験」は、児童とのふれあいや教師の教育活動の参観を通して児童や教師像についての理解を深める目的で、また「授業実践演習Ⅰ・Ⅱ」は、授業参観・指導案作成・模擬授業等を通して、授業実践力の基礎を体得させることを目的として位置づけられた科目で、小学校教育実習の準備教育を兼ねた科目でもある。

一方本稿で取り上げる「学校インターンシップⅠ」は、小学校教育実習の直後に位置づけていて、小学校教育実習と連続させることによってより実効的な実践的指導力の体得を期待したものである。さらに「学校インターンシップⅡ」は、４年後期の必修科目である「教職実践演習」との相互効果を期待して設定したものである。

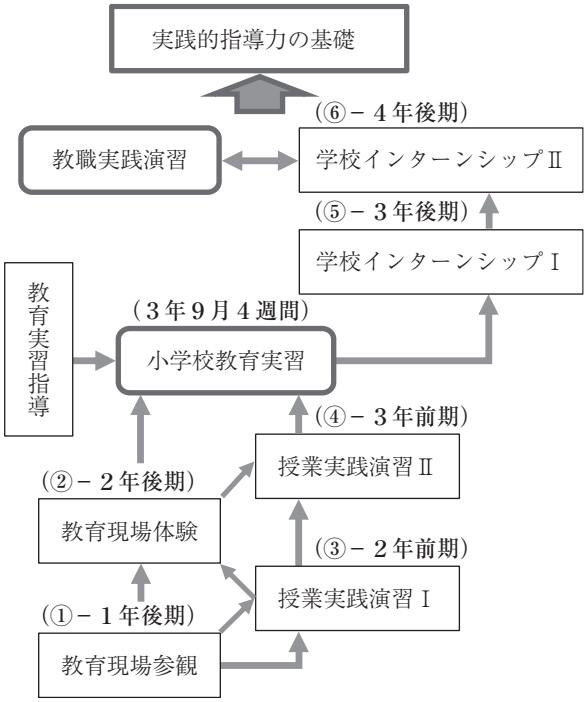

図１　学びの森教育プラン

3　小学校教育実習で習得した実践的な指導力

本稿では、2017年９月に４週間、各務原市内の14小学校で教育実習をした学生（29名）のうち、実習後に同一校で「学校インターンシップⅠ」を履修したＡ男（男子学生）を中心に取り上げ、「実習記録」を基に、学び得た児童観、指導観、教育観等について触れてみたい。

事例１　教育実習で学び得たこと（Ａ男）

あっという間の１か月だったにも関わらず、学び得たことは本当にたくさんあった。…略…

一番はやはり『発問』についてである。教育実習を通して児童の前に立ち授業をしてみて、発問の吟味の重要さに気付いた。それまで大学の講義内で児童役の大学生に通じた発問が、実際の児童にはまったく通用しないことが痛いほど分かった。児童の実態を把握し、児童の身になって発問を考え、補助発問や深める発問も用意しておく。ここまで準備しておいてやっと授業ができることに気付くことができた。これが授業を実際にやらせていただいた一番の学びであった。授業が終わる度に発問の吟味が足りていないと反省し次への課題としたが、なかなか達成することはできなかった。しかし、研究授業の際(社会科)は、発問が児童に理解され、多くの挙手があり、最後の一場面で課題を達成することができ、達成感を味わうことができた。発問の吟味の重要性は、先生たちからも教えていただいたが、やはり授業を通しての学びであったため、児童から教えてもらったものである。児童を目の前にした授業を通して、児童の発達段階、それをふまえた教具の工夫、グループ学習、活動の切り替え方など、授業改善のための課題を多く見付けることができた。…略…

事例１は、Ａ男が実習終了後に学び得たことについて記述したものである。彼にとり４週間で一番心に残ったことは、授業に臨む際の「発問」であったことが読み取れる。Ａ男は授業に取り組む中で児童の反応を通して発問の重要さと難しさに気付き、毎回吟味して臨んでもなかなか成果があらわれず、授業における「発問」について相当苦心したことが窺える。このことは、教師になった際の大きな財産になるもので、教育実習を履修したからこそ得られた学びである。

本学の場合、４週間の教育実習で12時間以上の授業実践を各校にお願いしていることもあり、他の学生の記述にも、授業に関わって学んだことが一番多く記されている。

その他では次のような「学び」も見られた。

事例２　教育実習で学び得たこと（Ｂ子）

－略－生活の中で人が傷つくような言葉は見逃さず、その場ですぐに対応して、ダメなものはダメだと伝えていくことが必要だということも学ぶことができました。時と場合に応じ、そこにいる児童を理解した上で、どのように対処していくのかを考えなければならないということが分かりました。同時に、とても難しいことだということも感じました。－略－

事例２のＢ子の場合は、実習中、児童間のトラブル場面に実際に直面し、指導の在り方について具体に即して学んだことや難しさが実感をもって記され

ている。

事例３のＣ子の場合、４週間の教育実習を体験して、教師としての適性があることに自信を持ち、教職に就くことの意欲が一層高まったことが読み取れる。

事例３　教育実習で学び得たこと（Ｃ子）

－略－「この４週間で先生としての特性があるか確かめなさい」と校長先生に言われスタートしたが、実習を終えてみて、適性があるかは答えが出せなかった。しかし、自分の人生、この職だったらやる価値がある、自己を犠牲にしても頑張れると思いました。－略－

他の学生たちの「実習記録」に目を通しても、教師の仕事の大変さ、児童とのかかわり方、教師を目指す気持ちの高まり等について触れている。担任教師の路線の中での体験とはいえ、児童観、教師観、教育観等、実践的な指導力の基礎に関わる資質能力が一定限度体得できたことが窺える。

この教育実習の後すぐに学生たちのうち14名が「学校インターンシップⅠ」の授業に臨んだ。

４　「学校インターンシップⅠ」の目的と指導計画

＜目的＞

小学校教育実習前そして教育実習で学修し身に付けた教科指導の知識や技能を生かして、小学校教育における様々な指導補助活動に携わり、小学校教員として求められる実践的な指導力の基礎を身に付ける

＜指導計画　全16コマ（講義６・実習10）１単位＞

①　オリエンテーション、学校インターンシップの意義と活動方法

②　第１回事前指導①
「学校インターンシップⅠ」に臨む姿勢、臨み方。

③　第２回事前指導②
学校インターンシップ活動計画の作成
各自実習校を訪問し、活動日と時間、活動内容等について実習校の担当教員と打ち合わせを行い、活動計画を作成し、大学と実習校に提出。

④　学校インターンシップ（前半）
計画に基づいて、各自学校インターンシップ活動に携わる。

⑤　事中指導
活動状況等の交流。後半の活動に生かしたいことを明らかにする。

⑥　学校インターンシップ（後半）
交流会で学び得たことも取り入れ、各自計画に基づいて学校インターンシップ活動に携わる。

⑦　事後指導
学校インターンシップで学び得たことの交流とレポート作成

５　「学校インターンシップⅠ」の実施と体得した実践的な指導力

(1) 事前指導・事中指導・事後指導

「学校インターンシップⅠ」は、教育実習を行った小学校での実習（教育活動）を原則としたが、中には、学校側・学生側の都合により、実習校以外の市内の小学校で実習する学生もいた。

本学と各務原市との間の連携協議会の場で、前年のうちに計画書を提示し、市教委や校長会の承認を得るようにしている。また、各担当教員が教育実習の挨拶や学生指導のため実習校に赴く機会をとらえ、「学校インターンシップⅠ」の実習依頼をした。そして、指導計画にもあるように、実施に当たっては、事前指導・事中指導・事後指導を実施した。

＜事前指導＞

活動時間について学生に課した時間数は、90分を１コマとして10コマ以上である。小学校の一単位時間を0.5コマとすることから、20単位時間以上行うこととなる。学生の課題解決意欲や実践力育成意欲にかんがみ、学校との折衝によって可能な時間は出向くことができるようにしている。つまり、自学の時間ともいえる。各学生は限られた時間を活用して、将来就く教職についての現場体験を継続することにより、就業してから即実践が可能な力を身に付けていくこととなり学生の就労意欲と責任感等の醸成となる。

各小学校では、教員は、朝子どもを迎えてから、

朝の会、第１時限から第６時限までの授業、給食、掃除、休み時間、帰りの会、下校指導等、一日中子どもと接しており、各個に応じた指導、援助、助言等様々な状況に応じた対応を行っている。また、時に、保護者、地域の人との面談等を行っている。授業や、諸活動、行事等は子どもにどんな力をつけるのか、そのねらいや効果的な取り組み方、保護者や地域の人の支援内容や方法等、様々なことについて事前に準備を怠ることができない。その様な表に見えない行為や考え方について学ぶ機会が学校インターンシップとなることを指導してきている。

また、以下の「活動例」をあげて、学生や学校に示している。「例」としたのは、各学校で創意工夫をしていただき、子どもの将来を担う教師となる学生の状況に応じた内容を相談の上決定していく営みも、学生に自己理解を促進し、実践力を育成していく重要な過程と考えているからである。学生の活動は、基本的に、「教育実習」とはねらいが違うため、あくまで「指導補助」としての役割を担っている。以下にその「例」をあげる。

ア、授業での指導補助
- ・少人数での指導補助
- ・チームティーチング
- ・実験や工作等での指導補助
- ・校外学習での指導補助（生活科、総合的な学習の時間、社会科、理科等）
- ・授業に使用する教材作成

イ、特別活動補助
- ・校外学習（遠足、野外学習）の引率
- ・学級会活動の指導補助

ウ、学級経営指導補助
- ・掲示用資料作成
- ・教室壁面掲示
- ・休み時間での遊びや諸活動
- ・給食配膳
- ・掃除

エ、特別支援教育指導補助
- ・障害種に応じたよりそい
- ・学習支援

オ、学校行事補助
- ・運動会の準備、当日の器具の手伝い、生徒指導、後片付け

カ、その他教育活動指導補助
- ・放課後等の学習支援
- ・放課後等の遊びを含めた活動支援
- ・夏休みを始めとした長期休暇中の学習等の支援
- ・登下校の安全指導
- ・夏休みの水泳支援

キ、教育実習中の担当学年や学級、それ以外の学年や学級の活動内容に対する補助

等の「例」を示しながら、学校と学生が意図をもって、学校インターンシップに臨む課題を持ち、活動計画を作成し、活動に臨ませた。

活動の半ばにさしかかる時期に＜事中指導＞を行った。お互いの活動内容や方法、よかったこと・困ったこと等を交流し合い、話し合いの内容も参考にし、後半の活動に向けて活動計画の修正や新たな課題設定をした上で、後半の活動に取り組ませた。

学校インターンシップがほぼ終了した段階で＜事後指導＞を実施し、パネルディスカッション形式で、学び得たことの交流を行い、交流内容も含めてレポートにまとめさせた。

(2) 活動計画の作成（時間帯・活動内容・活動時間）と学校インターンシップの実施

「学校インターンシップⅠ」は、３年生後期の、教育実習終了後の履修科目である。

３年生は、月曜日から金曜日の第１時限から第４時限まで授業が計画されており、各学生が必修または選択する授業の合間を縫っての活動となる。また、放課後は曜日によって部活動が計画されていたり、アルバイトの予定があったりするため、学生によっては、活動する時間に制限ができてしまう。そのため、学生側は、自分の学修と生活の時間管理が大きな課題となる。このことを前提に、学校側の要望に応えるための調整が必要であり、その日にちと時間と活動内容を決めていく過程は、学校や会社に就労してからの働き方とも関わり、職業従事における生きがいややりがい、責任感、自己肯定感等にもつながっていくこととなる。学生は、アポイントを自分でとり、「いつ、どのように、どんな内容」で活動するのかを学校側との折衝で決めていく。したがって、活動時間帯や活動内容は対象学校によって異なり、学生によっても異なることとなる。

「学校インターンシップⅠ」は選択科目（１単位）

ではあるが、教員志望の学生にはできるだけ履修するよう勧めた結果、14名（教育実習は29名）の学生が履修した。このうち３章で取り上げたＡ男の課題と、計画した活動内容は表３の通りである。

＜課題＞

・実習では経験できなかった教育活動に積極的に参加する。
・実習クラス（６年）以外の学年の指導補助等にも挑戦する。
・特別支援教育の授業も参観する。

＜活動計画＞

表３「学校インターンシップⅠ」活動計画（Ａ男）

月日	曜	時間帯	活動①	活動②
10/10	火	13～18	６年社会見学事前指導	
10/12	木	７～12	特別支援学級授業参観	３年算数学習支援
10/17	火	13～18	６年総合授業支援	６年生宿題評価
10/19	木	7～12	特別支援学級授業参観	３年算数学習支援
10/31	火	13～18	６年社会見学事前指導補助	
11/7	火	7～16	６年社会見学引率補助	
11/21	火	13～21	４年生宿泊研修指導補助	
12/12	火	13～18	４年英語授業参観	６年生宿題評価
1/16	火	13～18	４年算数学習支援	６年生宿題評価

Ａ男の場合は、上表の通り、９日間52時間の活動に携わっている。教育実習校の担当クラス（６年）での活動を中心に、自らの課題を踏まえ、３年生の学習支援、４年生の宿泊研修指導補助等他学年での実習にも携わっている。また、特別支援学級や４年生の英語の授業参観等、自らの視野を広めるための自己研修もしていることが分かる。

他の学生も、授業補助、運動会の指導補助、あいさつ運動の指導補助、宿泊研修の指導補助、放課後学習支援、昼休みの遊び補助、フィールドワーク活動補助、特別支援学級の指導補助等に、さらに、教育実習の担当クラス以外の学年での授業補助等にも携わり、教育実習で経験できなかった教育活動に広く携わっていたことがわかる。他の学生の多くは、20単位時間～30単位時間の活動時間であった。

(3) 学生が身に付けた資質・能力（実践的指導力）

表３の計画に基づいて学校インターンシップ活動を終えたＡ男の実習ノートの最後のまとめが事例４である。

これを見ると、Ａ男は、教育実習では経験しなかった校外研修の準備、タイムスケジュールの作成、翌日の授業準備を話し合う教師集団に入る等、学校教育現場で日々行われている様々な教育活動について「教育実習中でも体験できなかったこと」と、感動した様子で記している。また教育実習と学校インターンシップで体験したことを基に卒論にまとめたいという思いも述べている。

事例４　学校インターンシップⅠで学び得たこと（Ａ男）

９月の１か月間の教育実習を終えてすぐの10月から学校インターンシップとしてＲ小学校にお世話になった。つまり教育実習も含めて、約半年間小学校の現場を見て、聞いて、感じて学ぶことができた。現場ならではの多く体験、体感することができ、とても充実した学校インターンシップであったと感じている。

学校インターンシップでは、教育実習中でも体験できなかったことが数多くあった。…中略…校外研修に２回させていただいたが、その準備段階からお手伝いさせていただいたため、先生方が資料等をどれだけ念入りに注意深く確認して用意しているのか、またタイムスケジュールをどれだけ綿密に計画されているかということを知った。…中略…同学年の先生同士が翌日の授業準備について話し合ったりするなど、子ども達が帰ってからの職員室の先生方の姿も、とても尊敬でき、この仕事のやり甲斐はこういうところにもあらわれているのだなと強く感じることができた。…中略…　私は卒業論文で、算数科教育についてとりまとめようと考えている。最終的には、自らの教育観や教育方法を導き出すかたちでまとめようと構想している。教育実習と今回の学校インターンシップで３年生、４年生、６年生の算数の授業を多分に参観する機会を得ることができた。この場

での経験を最大限に生かして、今後の卒業論文制作に励んでいきたいと思う。…後略…

３年生の段階で卒業論文について考え見通しがもてているのも、同一校で連続して実習をして刺激を受け視野が広がったためであると考える。

事例５　学校インターンシップⅠで学び得たこと（Ｄ子）

小学校実習に引き続き、継続して学校に関わらせていただき、子どもの成長をより多く感じると共に、多くの教育方法を知ることができました。まずは、自分が実習で担当させていただいた４年１組の宿泊研修では、実習以来の子どもたちの様子でしたが、本当に「自分たちのことは自分たちでやる」「考えて行動する」「仕事を責任を持って行う」など、実習したときよりとても大きく成長していることを感じ、とても感動した。－略－私が実習した１か月間では絶対感じることはできなかったし、長期的に子どもを育てるということがよく実感できた。－略－

事例５のＤ子の場合、教育実習と学校インターンシップを連続して実習したことで、子どもたちの成長した姿、成長する姿を直に観ることができた感動を述べている。連続・長期の実習の効果が見られる姿である。

次は、教育実習校の都合で市内の他校で学校インターンシップに携わったＥ子の記録である。

事例６　学校インターンシップⅠで学び得たこと（Ｅ子）

－略－私は実習を行った学校とインターンシップを行った学校が異なるため、学校によってスタイルが違うということが分かりました。授業の中、生活の中、登下校の中で、それぞれ地域性や校風があることが感じられました。大学で事前に新しい学校の授業スタイル等を聞いていたので、授業補助の活動をするときも戸惑うことはありませんでした。－略－教育実習では知ることができなかった事務作業を行ったことで学校の内部や教師の業務の広さを知ることができました。－略－

事例６のＥ子は、教育実習とは違う学校で活動したことで、学校の地域性や校風の違いに気付いている。また、事務作業に携わったことから教師の業務の幅広さにも気付いていて、他の学生とはまた違った学びを体験していることが分かる。

その他の学生についても、Ａ男・Ｄ子・Ｅ子同様、多様な体験を記していて、実践的指導力の基礎を体得する上で、教育実習と学校インターンシップを連続して同一校で実施することの有効性が認められる。

(4) 実習校の校長、担当教員の評価から

実習校の校長に次のようなアンケートをとると共に聞き取り調査を行った。

＜質問事項＞

1．原則として、教育実習を経験した学校において学校インターンシップを行ったが、このことについてどう感じておられるか。
2．実習時間は、基本的に10コマ、学校での活動時間は45分を0.5コマとし、合計20単位時間程度をメドにすることをどう考えておられるか。
3．その他「教育実習以外にも都合のつく学生には来てほしい」等自由に記述して下さい。

また、それぞれについて、校長から見た学校側と学生側のよかったと思うこと、改善したいと思うことを述べてもらった。

＜総括的によかったといえること＞

・教育活動の補助的な業務の対象となる活動の種類が多様であった。
・教師が授業や行事、諸活動のための準備に多くの時間を費やしていることに対して具体的に補助してもらえた。
・教育実習の学校で行うことは、学生が当該校の子どもや職員構成、時間割、１日の教育課程を知っているので、コミュニケーションがよくとれ、活動をお願いしやすかったし、学生も取り組みやすかった。
・教育実習時の担当学年や学級のみならず、それ以外に他学年と他学級、特別支援学級等ニーズのあるところへの支援が可能であった。
・中部学院大学の学生にとって、教育実習の期間だけでは不足している学びを、インターンシップをすることで補う場としてとてもよい取り組みであった。

・教育実習で解決できなかった課題を、この機会に解決していくことでより学生が成長してくれたと思う。
・経験をさらに積むとよいと思う学生もあるので、教育実習でできなかったことに取り組んでほしい。
・教育実習時の担当した学級以外の学級にも入ってもらった。担任以外の教員と接することとなり、多面的に担任の子どもへの対応の仕方や教授法を知ることができたのはよかったのではないか。
・活動内容が固定されていないので、学生の気づきが養われたのではないか。
・教職員や子どもとの関係性ができていることが短期間で行う今回のインターンシップでは効果を発揮したと思う。
・10コマ以上来てくれたので助かった。
・特別支援教育コーディネーターの教員を担当者として、セッティングを行った。様々な要望に対しての対応が担当者のところに集まり、担当者は学生のことをよく理解し、また、学生も担当者の「子どもとのふれあいを第一に大切にしてほしい」という意図をよく理解していたので、マッチングがスムーズに行えた。
・活動内容は、子どもについて寄り添うこと、授業用の資料印刷、テスト監督と採点をはじめ多くのことをしてもらった。
・年齢が近いこともあり、歳の離れたお姉さんといった近しさを子どもたちが感じており、子どもはとても喜んでいた。
・活動時間が、学生にあわさざるを得なかったので、資料印刷や放課後の取組等体験させることができなかったことがあり残念であった。
・週１回ということではなく、火曜日の午前中とか、数日間連続的にとか固定されると計画がたてやすいと思った。
・毎年度、願いや課題をもって意欲的に活動する学生を希望する。活動が単位取得のためだけなら遠慮してほしい。今回のインターンシップは学校にも、学生にもよい取組であったと思う。
・教職員数が少ないので、教育実習で実習を行った学生でなくてもやる気のある学生を受け入れたい。

＜大学側への希望＞

・毎年教育実習生が配置されるわけではないので、インターンシップを行うときに配置を配慮してもらえるとありがたい。
・インターンシップは10コマ以上可能であるということであり、本校にとっては、20単位時間程度であった。もっと、学校に来て子どもたちと接したり、教師の補助をしたりする等お願いしたかった。単位となる履修科目ということはわかっているが、学生の中には、可能な限りより多くの時間を補助してくれた。そのことに感謝している。
・教育実習生でなくても、学校に来て支援をしてほしい
・新しい学生であると、どんな内容をどのようにお願いしたらいいのかの検討に時間がかかり、より信頼をもって取り組むためには、教育実習生が当該校に来てもらうようにしてほしい。

この「学校インターンシップⅠ」の取組は、学校の教職員数や子どもの実態にもよるが、高い評価を得た取組であった。

担当教員の評価もおおむね同じような内容であったため、校長の具体的な評価内容を記述した。

(5) 実習指導に当たった学部教員の評価から

中間報告会やまとめの会で学生たちは具体的な振り返りをしていた。学生が抽象的な概念的な言葉を使って振り返るのではなく、具体的に実習内容を述べたり、教育実習との違いを述べたりすることができるようになっていることは、より実践的な活動が行われたことの証左といってよい。

また、学校の配慮もあり、教職員の一員としての活動ができていた自覚と自信が表れていた。教師になるために、教員採用試験を受け合格したいという意識が増大していると感じた。また、他の職業についたとしても、就労意識が以前よりまして高まったと考える。それは、その後の教職センターや図書館での自学の回数や時間、また、質疑を求めてくる様子からも伺える。

6　成果と課題

教育実習と学校インターンシップを連続させることの効果について、「学校インターンシップⅠ」の実践から考察してきたが、履修した学生側と、大学側から成果と課題を挙げてみたい。

学生側にとっては、以下の様なことがあげられる。

・同一校でのインターンシップは教育実習の期間における課題を明かにする機会となった。また、一面的な教師像から、教育実習では感じられなかった多面的な教師像を知ることができた。
・自ら課題を持ち、体験的に実習ができたことから、教師になったときの実践的な力が身についてきている。
・学生自らが課題を持ち、授業、子どもの生徒指導、校外学習や諸活動、諸準備等教師の職務内容に苦労をいとわず真摯に向き合うことが成長につながった。
・受け入れた学校側が学生の力量にあわせた活動内容を計画し検討されたものについての実習であった。教師の職務の理解を促進するには、限られた条件の中ではあるが、さらに活動する期間、回数、内容等の工夫が必要である。

大学側にとっては、以下の様なことがあげられる。

・教育実習に引き続いて、同一校を基本として、学校インターンシップを計画実践したことは、「将来を担う教師を養成する」という基本的な考え方を受け入れ校もされた。このことが連絡を密にしながが協働で学校インターンシップを行え、学生の教師力の育成につながった。
・教師は学校の教育目標の具現に向けた教育課程に基づいた日々の取組をしている。学校の全体像を理解しながらかつ自分の役割を果たしていくといったその学校に求められた教師像の一端を経験できた。学生は卒業後正規の教員になっていくか、講師として教員になっていくことを考えると、教育実習とインターンシップといった学外でのOff-JTと大学でのOJTの接続をさらに考えていく必要がある。

おわりに

企業によっては、インターンシップの対象となる職務内容を決めているようなところもある。また、インターンシップをするしないに関わらず、採用の公平性を保つことを大切にしているところもある。

昨今、各県の教育委員会は、「教師塾」といったものを作って、講師や大学生を対象に参加を募り、教師としての必要な資質能力の向上と、より実践力のある即戦力となる教師の育成をめざし、さまざまな施策を行って、ふさわしい教員の採用に努力をしてきている。これも、受講をしたから採用試験そのものに加点がされるわけではないが、多くの講師陣は実際の教員経験者が行うため、具体的で明日に生きる講座が用意されていることから受講者にとって有意義なOff-JTの時間となると思われる。

この「学校インターンシップⅠ」の取組は、校長などの評価にあるように、送り出す側（大学）と受け入れる側（学校）、そして、学生にとってメリットのある活動と言える。

今後も充実した内容となるように対象学年、期間、内容、方法等創意工夫していくことが大切である。

引用文献

・荒木淳子・伊達洋駆・松下慶太（2015）『仕事・学び・コミュニティー　キャリア教育論』（慶應義塾大学出版会）
・歌川光一・鈴木　翔（2016）『教育実習と学校ボランティアの関連性をめぐる研究動向とその課題』（秋田大学教養基礎研究年報73-81）
・教育職員養成審議会（1997）『新たな時代に向けた教員養成の改善方策について』（第一次答申）
・高良和武（監修）（2007）『インターンシップとキャリア－産学連携教育の実証的研究－』（学文社）
・中央教育審議会（2012）『教職生活全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について』
・中央教育審議会（2015）『これからの学校教育を担う教員の資質向上について』（答申素案）
・中央教育審議会（2015）『これからの学校教育を担う教員の資質向上について』
・友田靖雄（2017）『実践的指導力の育成に資する「学びの森教育プラン」の中間評価～＜体験＞と＜省察＞を基軸とした2年間の実践を踏まえて～』（中部学院大学・中部学院大学短期大学部教育実践研究）
・文部科学省・厚生労働省・経済産業省（1997）『インターンシップの推進に当たっての考え方』（2014年4月一部改正）